

専門演習における地域と連携した取り組み (2)

—宮代町里山自然体験活動を中心に—

The efforts on community-university collaboration of seminar class for
The Miyashiro-machi Satoyama-nature-activities (2)

田中卓也・兼古勝史・小林田鶴子
Takuya TANAKA・Katsufumi KANEKO・Tazuko KOBAYASHI

概要

共栄大学教育学部では、大学3年生から専門演習の授業が始まるが、これは卒業論文作成とそれに関わる活動である。その専門演習での活動で、一昨年から埼玉県南埼玉郡宮代町と連携した小学生対象の里山自然活動を行っており、本年度で3年目を迎えた。本稿ではここまでの3年間の活動においてどのような活動が行われ、児童や学生等にどのような影響を与えてきたのかについて迫るものである。またその際に、里山活動に参加した児童やゼミ学生、ボランティア学生にアンケート調査・感想文の執筆を実施し、彼等の声を拾い上げ、分析・考察を試みるものである。また過去2回の活動の概要や内容についても合わせて分析・考察を行い、意義を見出したい。

キーワード：専門演習、地域連携、自然活動、新しい村、山崎山、手づくり楽器

Abstract

In the Department of Education at Kyohei University, the specialized seminar start in the third year. In the specialized seminar, the students start to prepare for their graduation theses and write them. They have had nature activities in Satoyama for elementary school children in cooperation with Miyashiro-machi, Saitama Prefecture for three years.

The purpose of this paper is to show what these activities are and what kind of influences they have had on the elementary school children and the university students. This paper includes analyses of the results of the questionnaire of the elementary school children and the university students who participated in the activities and essays about the activities written by them. This paper also reports the details of the activities and considers the significance of the activities for the specialized seminar.

Keywords: specialized seminar, regional partnership, nature activities, new village, Mt.

Yamazaki, Handmade Instrments

目次

1. はじめに (田中卓也)
2. これまでの経緯 (田中卓也)
 - 2-1 3年目を迎えた里山活動
 - 2-2 里山活動でお世話になっている方々
 - 2-3 山崎山と新しい村
3. 活動の概要 (田中卓也)
 - 3-1 2014 (平成 26) 年度の活動
 - 3-2 2015 (平成 27) 年度の活動
 - 3-3 2016 (平成 28) 年度の活動
 - 3-4 里山活動取り組み前 (事前) アンケート調査から見えること
 - 3-5 里山活動取り組み後 (事後) アンケート調査から見えること
(田中卓也・小林田鶴子)
 - 3-6 参加学生の感想から
4. 「手づくり楽器」づくりワークショップについて (兼古勝史・小林田鶴子)
 - 4-1 準備
 - 4-2 当日の実施状況
 - 4-3 学生と地域の連携
 - 4-4 子どもたちにとっての意義
 - 4-5 里山での「手づくり楽器」づくりの活動について
5. おわりにー今後の課題ー (田中卓也)

1. はじめに

田 中 卓 也

本稿は昨年執筆した「専門演習における地域と連携した取り組み」(『共栄大学研究論集』第 14 号、2016 年 3 月)の続編であり、専門演習における地域連携活動についての意義と代替わりをした学生等の学びについて、検討するものである。なお研究対象は専門演習の授業の一貫として行った里山自然活動およびゼミ学生・有志ボランティア学生であり、田中卓也ゼミ・兼古勝史ゼミ(旧小林田鶴子ゼミ)の合同で実施した(なお以下の文章からは田中ゼミ、兼古ゼミ、小林ゼミと略記する)。研究方法については、両ゼミ学生および有志ボランティア学生へのアンケート、里山活動当日に実施した参加児童および保護者へのアンケート、参加学生の感想文より考察を行っている。

2. これまでの経緯

田 中 卓 也

2-1 3年目を迎えた里山活動

専門演習の体験的学習の中核をなす里山自然体験活動は今年で3年目を迎えることになった。学生にも田中ゼミでは里山活動のあることが認識され、さらに恒例な活動というイメージが認められるようになった。同時に宮代町の公立小学校の児童においても、「毎年、共栄大学のお兄さん、お姉さんが夏と一緒に遊んでくれる」というイメージが定着してきたようにも考えられる。いまや宮代町の教育の一つの柱とさえ、いわれるまでになった。また里山活動を展開している宮代町内にある「新しい村」や「山崎山」についても学生等が事前に調査する目的で幾度も訪れることになるので、同地やその周辺地域のことに ついても地理的特徴などがおおよそ把握できるようになってきた。

山崎山の入山には、必ず宮代町教育委員会（生涯学主担当の職員 主査の小林和弘氏・田中啓之氏）の方に事前に連絡をしたうえで、入るといふ取り組み前からの規則があるため、学生等の代表者は自ら、教育委員会の方への連絡を入れ、それに応じて取り組んできた経緯がある。また入山時には、虫刺されの予防に、虫除け剤による処置を徹底した。

2-2 里山活動でお世話になっている方々

この里山活動では教育委員会の方々のほかに、山崎山を指定管理されている「さいたま緑のトラスト協会」の代表を務める八木橋孝雄氏の力も大きい。八木橋氏は、元宮代町立前原中学校の理科教員であり、現在埼玉県環境アドバイザーにも就任されていることから、理科全般について専門とされている方である。里山活動はもちろんこと、町の児童、生徒を対象とした自然鑑賞会、ホテルの鑑賞、ツリークライミング講座など手がけているものが多い。昨年からは、同所を中心に「山崎山まつり」と称する、秋の自然体験活動を取り入れるようになり、本学の田中ゼミ、小林ゼミの有志学生らとその活動補助員として児童や町民の方々と積極的な交流を図った。八木橋氏からは、里山活動の極意だけでなく、ゼミ学生の将来のことを気にかけて下さり、小学校教諭としての心得や授業のヒントなどさまざまな指導をしてくださるところも大きな役割を果たして下さっている。

2-3 山崎山と新しい村

ここでは、里山活動で拠点となる「山崎山」と「新しい村」について「特集 山崎山の雑木林」(<http://search.yahoo.co.jp/search>)に掲載されている記事を中心に紹介しておきたい¹⁾。

自然の宝庫 山崎山

▼田園や屋敷林など、自然にあふれた環境と景観に恵まれている宮代町。東武動物公園駅から新しい村へ向かい僅か1kmのところには、豊かな自然が残る代表的な場所として「山崎山の雑木林」があります。

コナラやクヌギなどからなる雑木林は、広さが約1.4ha。メジロやコゲラなどの野鳥や、カブトムシやショウリヨウバッタなどの昆虫、ツリガネニンジンやウグイスカグラなどの植物が観察できる自然の宝庫となっています。

山崎山を守る取り組み

▼豊かな自然が残る山崎山は、県東部に残る貴重な雑木林として、平成12年に県のさいたま緑のトラスト保全地に選ばれました。翌年には、県と町で土地を取得し、あわせて町では「宮代町環境基本計画」を策定。山崎山の環境や景観を守り、学びや自然とのふれあいの場としても活かしていこうと、市民団体や県、町が連携しながら整備や保全活動などに取り組んでいます。

また新しい村の職員の方々の支援も大きい。それには「宮代マーケット計画」を説明する必要がある。同じく「新しい村ホームページ」には以下のように説明されている²⁾。

地域内自給を高め、自立性のあるまちを目指すとともに、生業を通して農のある景観を守っていこうというもので、そのためのシステム作りと販売拠点の整備を行うものです。その一環として、平成12年度に町のほぼ中央にアンテナショップ結を設置（現在は閉鎖）し、そして「新しい村」内に本格的な直売施設「森の市場結（ゆい）」がオープンしました。宮代町には、お米、巨峰、梨、野菜など、豊富な農産物があります。新しい村では、そんな自慢の農産物の販売の場として、またイベントなどを通じて町外の方へも広めていく役割を担っています。

「宮代マーケット計画」では「新しい村」を拠点として、地元で育てている野菜などを直売している店が、町民のいこいの場であるだけでなく、商品流通の場所でもあるとしている。そのことは「地域内自給を高め、自立性のあるまちを目指すとともに、生業を通して農のある景観を守っていこうというもの」が大きな目標に掲げられていることとも関連する。

さらに新しい村のホームページでは以下のように同所を伝えている³⁾。

宮代町を、そして新しい村を訪れた皆さんは、周りの風景を眺めて「田んぼばかりだな～」と思ったことはありませんか？

都会の人から見たらいわゆる「田舎」と言ってよい宮代町ですが、山や海のような自然はありません。宮代町にとっての自然環境は、水田や畑、農業用水路、農家の屋敷林など、人の手によって作り出されたものが「自然」であり、町の面積の半分を占めています。

こうした「自然」は農家によって維持管理されてきましたが、かつては5割近かった農家世帯も今では1割以下にまで減ってしまいました。

- ・農地は生態系、景観、災害、地産地消、教育、福祉など多くのものにつながって行く。
- ・「農地」は農家だけのものではなく、全ての町民に恩恵をもたらしている。

そんな考えを持ちながらも「宮代の自然」が減少していくことを見逃してきてしまいましたが、平成6年に宮代町の職員プロジェクトによる試行錯誤からスタートし、平成9年度には「農のあるまちづくり計画」を策定し、町民の代表としての商店主、主婦、農家、そして役場職員がパネラーとなってシンポジウムをおこなうまでに発展しました。これにより議論され計画の一部となったのが、「新しい村整備計画」です。

かつては5割近かった農家世帯も今では1割以下にまで減ってしまったことを背景として、農業の復活を期待するものとして行われている「新しい村整備計画」の一環のものであることがわかる。

3. 活動の概要

田 中 卓 也

3-1 2014（平成26）年度の活動

2014年8月に宮代町教育委員会との連携で第1回「里山体験事業」が開催された。その活動概要を以下に掲げる。また、実施内容の具体的な部分については、田中ゼミ・小林ゼミが担当した内容を示す。

活動名称：「里山を通した自然体験活動」（あそべんちゃーわーど）

活動日時：2014年8月28日（日）9:00～14:00（後片付けなどの時間も含む）

活動場所：新しい村・山崎山（埼玉県南埼玉郡宮代町字山崎 764）

山崎山（チームワークラリー）

新しい村・広場（楽器づくり、おもちゃ作り）

山崎山集会所（流しそうめん）

協力団体：さいたま緑のトラスト協会宮代支部

活動の目的：①子どもの主体的な集団活動による社会性の育成

②自然体験、創作体験を通した情操教育

③達成感を通した自尊感情の育成

④身近にある自然や人々とのふれあい、郷土に対する愛着心の育成

活動内容：①あいさつ、諸注意（実行委員長・田中ゼミ生、宮代町教育委員会・小林和弘）

②山崎山のお話（さいたま緑のトラスト協会宮代支部代表・八木橋孝雄）

③チームワークラリー（山崎山の中を散策）

④手作り楽器づくり（宮代町で育った竹を使った太鼓の製作）・おもちゃ作り

⑤流しそうめん（宮代町の竹を切って利用）

参加学生：共栄大学教育学部（田中ゼミ4年5名、3年5名、小林ゼミ4年1名、有志学生1名）

計：12名 引率および総括責任者：田中卓也、小林田鶴子（2名）

関係者：宮代町教育委員会教育推進課職員：小林知弘、榎井恵未（2名）

参加児童：宮代町内在住の小学生30名

活動の具体的な内容については、田中ゼミが主に担当した「③チームワークラリー」の内容を次に記す。

田中ゼミでは、山崎山一帯を使用しての「チームワークラリー」を開催した。チームワークラリーでは「ワークシート」を用いて、チェックポイントを定め、小学校児童とゼミ学生（ボランティア学生）が交流を図るようになるため、グループをつくり、各グループが、ひとつずつチェックポイントに行き、クリアすることが命題となる。山崎山一帯をポイントチェックの場所に定め、右往左往しながら到達というものである。クリアした児童らは、竹楽器づくりに参加していくことになる。



【写真1】 2014年度「あそべんちゃーわーど！」の様子

3-2 2015（平成27）年度の活動

2015年度には第2回の里山自然活動が実施された。概要を以下に示したい。

活動名称：「里山を通した自然体験活動」(あそべんちゃーわーど)

活動日時：2015年7月25日(土) 9:00～14:00(後片付けなどの時間も含む)

活動場所：新しい村・山崎山一帯(埼玉県南埼玉郡宮代町字山崎 764)

協力団体：さいたま緑のトラスト協会宮代支部

活動の目的：①子どもの主体的な集団活動による社会性の育成

②自然体験、創作体験を通した情操教育

③達成感を通した自尊感情の育成

④身近にある自然や人々とのふれあい、郷土に対する愛着心の育成

活動内容：昨年と同様(①および②)

③チームワークラリー(山崎山の中を散策) 伝承あそび等

④手作り楽器づくり(山崎山の自然の材料を使った5種類の楽器の製作)

参加学生：共栄大学教育学部(田中ゼミ25名、小林ゼミ6名、有志学生10名)

計：41名 引率および総括責任者：田中卓也、小林田鶴子(2名)

関係者：宮代町教育委員会 生涯学習担当職員：小林知弘、田中啓之(2名)

参加児童：宮代町内公立小学校児童40名

活動の概要は平成26年度と同様であるが、その中身は変更されている。チェックポイントの数を増やしたり、募集人数も前回申し込んで参加者に選ばれなかった児童が多かったので、40名に増やした。小林ゼミが携わった④手作り楽器づくりのプログラムにおいても、楽器の数を前回の竹太鼓に加えて、パンフルート、ギロ、シェイカー、クィーカも製作した。2015年度の活動についても、2014年度のそれと内容に大差はない。しかしながら児童数も10名増加したため、田中・小林両ゼミ学生のほか、有志のボランティア学生10名を新たに追加したかたちで行うことになった。ボランティアについても事前準備などにおいて里山のリーダーが中心になって現地の下見、事前打ち合わせなどもしっかり行った。そのうえでの参加となった。この点においては、2014年度の活動では見られないものであったといえよう。



【写真2】 2015年度「あそべんちゃーわーど！」の様子

3-3 2016(平成28)年度の活動

さらに2016年度の活動は、以下のように行われた。

活動名称:「里山を通した自然体験活動」(あそべんちゃーわーど2016夏!)

活動日時:2016年7月31日(日)9:00~14:00(後片付けなどの時間も含む)

活動場所:新しい村・山崎山一帯(埼玉県南埼玉郡宮代町字山崎764)

協力団体:さいたま緑のトラスト協会宮代支部

活動の目的:①子どもの主体的な集団活動による社会性の育成

②自然体験、創作体験を通した情操教育

③達成感を通した自尊感情の育成

④身近にある自然や人々とのふれあい、郷土に対する愛着心の育成

活動内容:①あいさつ・諸注意(実行委員長:田中ゼミ生、宮代町教育委員会 小林和弘)

②山崎山のお話(さいたま緑のトラスト協会宮代支部代表・八木橋孝雄)

③ミッション・イン・ポッシブル(山崎山における児童と大学生との対戦レクリエーション) 伝承あそび等

④手作り楽器づくり(山崎山の自然の材料を使った4種類の楽器の製作)

⑤流しそうめん(宮代町の竹を切って利用)

参加学生:共栄大学教育学部(田中卓ゼミ25名、兼古ゼミ6名、有志学生20名)

計:51名 引率および総括責任者:田中卓也、兼古勝史、小林田鶴子(3名)

関係者:宮代町教育委員会 生涯学習担当職員:小林知弘、田中啓之(2名)

参加児童:宮代町内公立小学校児童51名

活動の概要は平成26年度と同様であるが、今年度も中身の変更があった。募集人数も前回申し込んで参加者に選ばれなかった児童が多かったため、さらに51名に増やした。田中卓也ゼミが携わった③「ミッション・イン・ポッシブル」の取り組みを中心に説明したい。「ミッション・イン・ポッシブル」はかつて映画でも上映された。児童は山崎山のなかで、お題に対し、それをクリアしていくことが求められる。①竹ぼっくりで速さを競うもの②竹鉄砲でお宝をゲットさせるもの③植物の名称・動物の名称を当てるなど次々とクリアすること課題が示された。クリアすると各ポイントにおいて「文字」が1つずつもらえることになっていて、全てのポイントをクリアすると文字がたくさん入手できる。これにより、キーワードを完成させ、当てるというものである。この取り組みは今回の里山活動では新たに取入れられたものであるが、参加する児童たちによって、いとも簡単に

次々とクリアするという予想だにしない事態に直面することになった。しかしながら満足の様子であった児童の姿が印象的であった。



【写真3】 2016年度「あそべんちゃーわーど」の様子

3-4 里山活動取り組み前（事前）アンケート調査から見えること

では、里山活動に取り組む学生らは、どのような思いでこの活動に参加しようとしていたのでしょうか。学生の事前アンケートより、彼等の心性を見いだしたい。

まずはアンケートについて、里山活動1週間前の2016年7月12日（火）から7月24日（日）まで約2週間にわたり、参加学生を対象に実施した。A41枚のアンケートであり、全質問は15問であり、10問は選択式、5問は記述式で回答するものであった。選択式の回答は、「5段階」で評価されるものであり、「5」がたいへんよくできた、「4」はよくできた、「3」はふつう、「2」はほとんどできなかった、「1」はまったくできなかったというものである。

まずは選択式の問題の回答について分析してみると、里山活動の参加や意義については、ほとんどの学生が理解しており、意義についてもしっかり把握していることがわかる。また「里山活動が大学の講義になること」については、約半分の学生が肯定しているのに対し、半数の学生は、講義化を否定的な立場で見ている。大学の講義としてはなく、大学の講義外の特別枠として設定し、そこで実施する方法が最適であるとのことである。

さらに「里山活動で学んだこと」については、9割以上の学生が「多くのことを学んだ」と回答している。

一方「記述式」の回答については、アンケートの時間が不定期であったことから、多くの回答を得ることは難しかった。しかしながら「来年も行うことがのぞましい」とか「続けるべきである」、「里山活動の意義は十分ある」という回答を多く得られた。

3-5 里山活動取り組み後(事後) アンケート調査から見えること

田中卓也・小林田鶴子

里山活動実施後すぐに採ったアンケートより、参加した児童および保護者がどのような感想をもったのかについて、まとめてみたい。アンケートは終了の1時間前から参加児童51名および保護者20名を対象に実施した。ゼミ学生に回収してもらったが、有効回答数は児童が48名、保護者が14名であった。両参加者の7割以上の回答を得られたことになる。

まずは「児童対象のアンケート」であるが、質問は全部で10あり、記述式が8、選択式が2であった。「活動がたのしかったか」という質問にはほぼ全員が「全部楽しかった」と回答している。「またやりたいと思った活動はなんですか」については「たけがっきづくり」、「全部」などの回答が多かった。最後の質問である「今日1日の感想を書いてください」では全員が「たのしかった」と回答している。

児童の多くは里山活動を楽しみしていて、学生達と楽しい思い出をつくっているだけでなく、いろいろな経験を通して学んでいることが読み取れる。

竹楽器について以下の回答があった。「楽器を作るときや音を出すときに、難しかったことはありますか」という質問については、「ない」という回答も多いが、それ以外には(マラカスの竹筒に紙のふたを付ける時の)「わごむをつけること」、(マラカスに)「いしをいれるとき」、(竹筒を)「のこぎりできるとき」などの回答が散見された。これより、作業自体は楽しいものの、決してスムーズにっていないこと、大変であることを感じながら、自分なりの竹楽器を製作したことがよみとれる。小学校1年生の参加者が多かったことから、竹を切る作業一つとってみても、大変な労苦であったことを窺わせる。「楽器をつくる時や音を出すときに工夫したことはありますか」の質問については「ない」という回答が多い中、「のこぎりをななめにした。フェルトがついたところでたたく」、「竹を切るときに少し刀をぬいてきるときりやすかったです」、「たいこのまんなかをたたく」、「たいこのえをかく」、「ギロで竹のぼうをつよくゆすったところ」、「自分だけのリズムをつくってみた」などの回答を得ることができた。これより、子どもたちは竹筒の様々な部分に、竹の柄を使って叩き方やこすり方を変えて音の変わり方を感じ、自分なりに音の出し方を考えてみたことが窺える。

では保護者へのアンケートの回答はどうであったのか。全部の質問は3であり、①「あそべんちゃーわーど」に参加された理由、②「参加された感想」、③「あそべんちゃーわーどへの今後のためのご意見」であった。①についての回答は、「家庭でできないような体験ができる」、「子どもが参加したいといったから」、「昨年も参加したから」、「お友達が誘ってくれたから」、「チラシをみて楽しそうだから」、「お友達と一緒に遊べる」、「学校で手紙をもらって」、「なつやすみを充実させるため」というものがほとんどである。どの意見も

肯定的なものである。また②についてはすべての回答で「楽しめた」となっている。③については、「また来年も参加したい」、「いろいろな企画で楽しめた」、「また楽しみにしています」という、肯定的な回答を得られた。また「他の学校の児童と交流できればいいのに」という回答も僅少であるが、あったことは今後の課題として検討に値するものである。

保護者は、基本的には児童が参加したいという意志のもと、参加させる姿勢を見せている。また以前から参加したこともある「リピーター」の方も少なくなく、参加を続ける様子が見えかけた。参加の動機については、児童が通学している小学校から事前にちらしを配付してもらい、それに好感触であることから参加した、というところがほとんどであった。おそらくは学生の手による告知ポスターの影響も大きいと推測する。また例年行われる「あそべんちゃーわーど」に児童を行かせることで、「夏休みの思い出」の1コマとして映し出されることになる。

今回の里山活動に参加した宮代町に住む児童・保護者らは、あそべんちゃーわーどに参加することを肯定的に感じており、次年度以降の企画にも大きな期待を寄せている。さらに学生と児童との交流のみならず、他の小学校の児童との交流を望む児童・保護者も存在し、それを可能にさせてくれる企画に感謝の念を抱いていることも少なくないということがいえるのである。

3-6 参加学生の感想から

田中卓也

本年度も、里山活動終了後に、参加学生への感想文を書くよう指示をした。9月末を締め切りに、ゼミ学生（企画実行委員）および有志ボランティアあわせ51名の学生が提出してくれた。感想文を一読してみると「成功」、「今後の自分にいかせるもの」、「友情が深まった」、「児童との交流のよさ」のコメントが目立った。また「教育委員会」・「さいたま緑のトラスト協会」との連携によって成功したことへの自負や、お世話になったという記述も目立つものとなった。

しかしながら他にも感想を持った学生が多い。以下にその感想文のいくつかを挙げる。

田中ゼミ4年生Iは次のように述べている。

参加する学年も小学1年生から6年生と様々な学年の児童が参加する中で、どの学年の児童も楽しむことができ、グループの絆が深まるような活動内容を考えることに苦労したように感じます。またゼミ3年生の後輩らと協力し、4年生はこれまでの経験を基にしながら、さらに3年生は新しい発想を出して積極的に話し合うことにより、すばらしい企画案をうみだすことができたように思います。また本番に向けての準備でも、ゼミ学生全員が限られた時間のなかで一致協力しあうことで、竹切り作業等をはじめ比較的余裕を持って備えることができたように見受けられました。

Iは、昨年までとは異なる企画の立案と後輩である3年生との討議によって内容を決定したことについて、先述したが、ゼミ3年生の後輩らと協力することで、4年生のこれまでの経験と3年生の新しい発想によりすばらしい企画案をうみだせたという。4年生のIも刺激になったことが窺える。

さらに、常に児童とのかかわりを大切にしながら、活動を行ったM(田中ゼミ4年生)の感想を見てみよう。

本番当日、私は副里山長のYさんと共に1日フリーとして全体を見回りながら進行を行いました。活動道具の不備で急遽竹を切り道具を確保しなくてはならないというハプニングがありましたが、皆が協力して助けてくれたので、無事活動を行うことができました。また、誰も大きな怪我もなく無事に1日終えることができ良かったです。子どもの人数より学生の人数的が多かったので、子どもたちへの支援を手厚く行うことができました。子どもたちと関わった3年生達がすぐ子どもたちと打ち解け緊張を解してくれたので、朝から笑顔が溢れる活動になったと思います。私自身、子どもたちもそうですが、お迎えに来ていただいた保護者の方々や参加した学生達、小林さん・田中さん・八木橋さんからもたくさん笑顔を見ることができてとても嬉しかったです。終わった後の達成感は一生涯忘れません。当日の反省として、道具の最終確認をしっかりとすること、リハーサルでもっと子供の姿を想定し本番の時間配分を行うこと、保護者の方へのアンケートを多く回答していただくために配布する時間を検討すること等が挙げられます。

最後に、子どもたちのアンケートを見ると「自分だけの楽器を作れて楽しかった」「またお姉さん・お兄さんと遊びたい」等、次回を期待する声が多く聞かれました。4年生は今回で卒業ですが、もっともっと良い企画ができるよう反省点や記録を3年生にしっかり引き継いでいきます

Mは今年度の里山活動の実行委員長を務めてくれた学生である。感想で「終わった後の達成感は一生涯忘れません。当日の反省として、道具の最終確認をしっかりとすること、リハーサルでもっと子供の姿を想定し本番の時間配分を行うこと、保護者の方へのアンケートを多く回答していただくために配布する時間を検討すること等が挙げられます。最後に、子どもたちのアンケートを見ると「自分だけの楽器を作れて楽しかった」「またお姉さん・お兄さんと遊びたい」等、次回を期待する声が多く聞かれました。4年生は今回で卒業ですが、もっともっと良い企画ができるよう反省点や記録を3年生にしっかり引き継いでいきます」と述べるように、企画の進行を常に考えながら、児童の手応え、保護者の思いについても気にしていることが伺える。実行委員長として最後まで責任を持って取

り組んでいる様子がわかる。

またこの企画は決してスムーズにいったわけではなく、そこには学生等自身の苦労も多分にあったようだ。田中ゼミ3年生Kは次のように思いを馳せている。

しかし、話し合いがうまく進まずいい意見が出ない時も多くあったことも事実です。当日まで何度も練り直し、本番当日を迎えた感じです。話し合いとは別に実際に行う道具作りも同時進行で進められました。一番大変だったのが、竹切りと丸太切りです。山崎山で行う里山活動ということで、自然を子どもたちに体験できる活動をということで竹や丸太を使った活動を取り込みました。そのため多くの竹や丸太が必要となりました。山に行って竹や木を切り、使うサイズに細かくして、危なくないように磨く作業をしました。当日は朝早くから集まり最終打ち合わせや準備が行われました。当日私は先輩からカメラ担当を任されました(中略)この活動はこれからも続けていくものだと私を含めた3年生全員は感じていますし、さらに今年以上のものになるよう、レベルアップすべきであると感じています。今年度の取り組みについての反省を生かし、来年度はさらにいいものにしていくべきだと強く感じています。そのためには先輩方の意見や今年の反省を基に、私たち田中卓ゼミ3年生、そして次年度ゼミに入ってくる後輩、有志でがんばってくれるボランティア学生が互いに協力し合い、「チーム一丸」となって作り上げることが必要だと思いました。「今までの先輩方が作り上げたもの+私たちが作り上げる新しいもの」こそが、子どもたちに多くの笑顔を与えられるものになればと思っています。そして、この活動が有名になりずっと続けることができれば良いと考えます

Kは次年度4年生になるという自覚と決意をもって述べている。Kは「この活動はこれからも続けていくものだと私を含めた3年生全員は感じていますし、さらに今年以上のものになるよう、レベルアップすべきであると感じています。今年度の取り組みについての反省を生かし、来年度はさらにいいものにしていくべきだと強く感じています。そのためには先輩方の意見や今年の反省を基に、私たち田中卓ゼミ3年生、そして次年度ゼミに入ってくる後輩、有志でがんばってくれるボランティア学生が互いに協力し合い、「チーム一丸」となって作り上げることが必要だと思いました。「今までの先輩方が作り上げたもの+私たちが作り上げる新しいもの」こそが、子どもたちに多くの笑顔を与えられるものになればと思っています。そして、この活動が有名になりずっと続けることができれば良いと考えます」と述べているように、4年生の姿を間近で見て、「今度はおれたちがやらなければ」という強い思いをもって感想を述べていることがわかる。この言葉を通して、3年生の面々は、里山活動終了後からすでに次年度の里山モードに切り替わっていることが窺える。

では、有志ボランティアはどのような感想を持ったのであろうか。次に3年生Iの感想を見てみたい。

現地に赴き、実際の場所を見ながら活動内容の確認を行ったので、ダイレクトに内容を理解することができたところも好感が持てた。今後の課題としては、全体説明及び現地視察の説明を、ほとんどがMで行っていたので、Mの負担が大きく感じられた。また、当日まで一緒に活動する異学年のメンバーの把握が、M以外ほぼわからなかったことが次への課題となるであろう。また可能であれば、説明を行う時には、活動ごとの、活動内容を理解しているメンバーが説明を行うべきであり、また余裕があれば、活動ごとに顔合わせを行うと、交流を深めるという意味でも良いのではないかと感じている。これはあくまでも私見であることをことわっておきたい。

ボランティア学生Iは、活動をシビアな眼で見ている。すなわち「リーダーへの責任の一局集中」について疑問を持っている。Kは「視察の説明を、ほとんどがMで行っていたので、Mの負担が大きく感じられた。また、当日まで一緒に活動する異学年のメンバーの把握が、M以外ほぼわからなかったことが次への改題となるであろう。また可能であれば、説明を行う時には、活動ごとの、活動内容を理解しているメンバーが説明を行うべき」と指摘し、責任者に集中してしまうため、連携協力が課題であることを自ら求めている。しかしながらこのKの発言は、企画を肯定し、そのうえで大変な作業であることを認識しての、発言であることもうなづける。

しかしながら、さまざまな問題は抱えながらも、児童にとってよい思い出になったことは想像に難くない。兼古ゼミ4年生のHは以下のように述べている。

竹楽器の作業では、去年の反省を活かし去年以上に良い活動ができたのではないかと実感しています。ですが、スムーズに進むようどれだけ工夫をしても、実際に行ってみるとうまくいかないことも多々あり、去年も活動を体験しただけあって声を掛け合いながら、それぞれが臨機応変に対応できたのではないかと思います。低学年の子どもが多いとのことだったのですが、私たちが考えていた以上に子どもたちの持っている力が強く簡単に作り上げていて驚きました。楽器を作り終わった後に、自分たちで作った楽器を嬉しそうに叩いたり、鳴らしている姿をみてとても嬉しくなったのと同時に大変なこともあったけどやってよかった、頑張ってたよかったと思うことができました

Hは4年生で昨年も同じ活動を経験している。Hによれば、「去年も活動を体験しただけあって声を掛け合いながら、それぞれが臨機応変に対応できたのではないかと思います

す。低学年の子どもが多いとのことだったのですが、私たちが考えていた以上に子どもたちの持っている力が強く簡単に作り上げていて驚きました。楽器を作り終わった後に、自分たちで作った楽器を嬉しそうに叩いたり、鳴らしている姿をみてとても嬉しくなったのと同時に大変なこともあったけどやってよかった、頑張ってたよかったと思うことができました」と語っているように、昨年の経験が力になっていること、さらには子どもたちの取り組みが思っていた以上に素晴らしいものに映っていて、児童ともども良い思い出の1ページになったとふりかえっている。いずれにせよ、いろいろと苦労や予測できない出来事などが生じるものの、仲間との協力やそれに培われた連帯感を持つことで、ひとつの大きな企画を成功に導くことができるということがわかったといえる。「準備は大変だけど、やりとげたい」と学生は口にする人が多い。彼等の感想を通じて、「あそべんちゃーわーど」は今後も伝統として受け継がれ、後輩達に受け継がれていくものになる確信をするのである。

4. 「手づくり楽器づくり」ワークショップについて

兼 古 勝 史・小 林 田 鶴 子

4-1 準備

子どもたちによる「手づくり楽器」づくりとこれを用いた「合奏」は、里山自然体験活動の中の活動の柱の一つとして、初年度から継続して行われてきた、子どもたちにも人気のプログラム活動のひとつである。ここで「手づくり楽器」について簡単に定義しておきたい。手づくり楽器とは何か、ということについては、これまで、あまりにもその言葉の意味するところが自明であるために、ことさらに定義をするということがあまり見られないが、本論では敢えて定義を試みる。ただし、これは本論考での議論や検討を明確にするための、とりあえずの(仮の)定義としたい。

本論考における「手づくり楽器」とは「身の回りの自然・生活環境にある素材を用いて、自らの手作業で製作し、製作者自身によって演奏される楽器または音具」としておきたい。このような「手づくり楽器」づくりの体験を通して、子どもたちは、素材の発見と選択、加工・製作、合奏のそれぞれの段階において、創造性を発揮する機会を得ることになる。それは「人間が音楽を生み出してきたプロセスに立ち返り、音を探求しながら楽器を作り、音楽につなげていく」(高田 2013)⁴⁾ 活動そのものである。今回の例でいえば、参加した子どもたちが、(1) 自らが作ること、(2) 身の回り(この場合は会場となった宮代町の山崎山)で入手できる材料を用いていること、(3) 自分が製作した楽器を、自らの手で演奏すること、が欠かせない要件となる。

里山自然活動における「手づくり楽器」ワークショップは、毎年、徐々に制作する楽器の数や演奏も充実し、今年度は子どもたちが「楽しみながら製作し最後まで完成し、時間

的余裕をもってアンサンブル(合奏)に臨む」ということを目標に2ヶ月ほど前から兼古ゼミの学生が主体となって準備を重ねてきた。ゼミ生6人は、昨年度までの経験をもとに、里山にある自然素材の中でも比較的入手が容易で加工もしやすい素材である「竹」にポイントを絞り、いかにして楽器の種類や音色、音程が単調にならずに、多様性を確保できるかに腐心した。実際に会場となる山崎山から大小様々な竹を切り出し、「叩く」「重ね合わせる」「擦る」「振る」「吹く」といった様々な奏法の可能性を探り、議論と実験を重ねた。最終的に、時間内に子どもの技術で完成させられる楽器として「叩く」=スリットドラム、ウッド・ブロック、「擦る」=ギロ、「振る」=マラカスの4種を製作することに決定した。この他に、カスタネット(「重ね合わせる」)や風鈴(「吊るす」)、竹笛(「吹く」)などのアイデアも検討されたが、製作時間や製作技術、演奏難易度などの理由から今回は採用しなかった。ギロなどの製作にやや時間がかかると予想される楽器については、あらかじめ、ある程度まで切り込みを入れるなど、製作途上の状態で現場に設置し、発見した子どもらがその作業のつづきを行い完成させるという方法で子どもたちに達成感を持ってもらうよう留意した。

このように、学生たちが準備段階で直面した課題は、限られた素材、限られた作業時間、子どもたちの限られた工作技能で、可能な範囲で多様な音色と音高、形態の楽器を引き出し、豊かな音楽活動につなげる、というもので、相反する課題と要請を調整しながら最適値を探す作業であり、これは、アートや表現というよりも、デザイン活動に近いものであったといえる。あらかじめ環境が整えられた教室の中で、完成された楽器で、決められた楽譜の音楽を教える体験とは異なる、野外ワークショップならではの貴重な体験だったといえよう。



【写真4】「楽器の材料が盗まれてしまった」と探す意欲をかきたてるように説明する学生



【写真5】竹楽器づくりのアドバイスをする学生

4-2 当日の実施状況

まず朝の集合時に、楽器作りがあることを知らせ、参加者への興味付けが行われた。そ

の後、ミッション・イン・ポッシブルの進行と並行して、グループごとに作る楽器が割り当てられ、製作に入っていた。

進行方法について、昨年までとの違いは、楽器の材料を与える時に、「材料が盗まれてどこかに隠されたので探して欲しい」と各グループに「巻物」なるものを渡して、材料を探し出すことを「ミッション」に追加し、ゲーム仕立てにしたことである。



【写真6】材料探しのミッションを指示する「巻物」

子どもたちは、「巻物」(写真6参照)を受け取って、そこに書かれてある指示に従って、材料のありかをつきとめ、材料を「入手」し、楽器作りの場所(全員同じ)で制作に取り掛かるように考えた。また、昨年度、楽器によって制作にかかる時間が違うことがわかった為、今回は材料を置く場所を2箇所にしたり、マラカスなどの短時間で作れる楽器については、材料を入手するにはクイズに正解する必要がある等の条件を入れる工夫をしたりして、全体的に同じような時間に楽器が製作できるようにも考えた。楽器作成については、昨年の安全性に対する対策が充分とはいえなかった反省から、子ども一人に学生が一人付くように配慮された。特にのこぎりなどの刃物を使う場面では、学生が丁寧に手の置き方などに注意を払っていた。楽器が完成すれば、昨年と同じように池の近くで合奏が行われたが、昨年のパンフルートのように音程の変わる楽器が無かったので、強弱を付ける指示を出したりして音楽に変化を持たせる工夫がなされていた。また、各パートのリズムは比較的演奏しやすい単純なリズム・オスティナート⁵⁾が考えられていた。

今年度の合奏では、もうひとつ新たな試みを実施した。合奏の最後に、音を徐々に小さくしていき、皆で「静寂」に耳を澄ました後、再び大きくしていく、という課題に挑戦したことである。「楽器の音」が徐々に聞こえなくなることと反比例して、それまでは背景でしかなかった周囲の「自然の音」「環境音」が立ち現れ生き生きと豊かに聞こえだす、という楽器の音と環境音の逆転現象を皆が体験したことは特筆すべきことであった。

4-3 学生と地域連携

里山での教育活動全般を通して言えることは、こうした取り組みの担い手が「大学生」であることの強みである。「学生」とは、いわば「子ども以上・社会人未満」の微妙な立場にあるが、その立場の曖昧さが、時に大きな力を発揮する。無論、宮代町役場の担当の方々が大きな意味でのグランドデザインを行い、教育内容に関しては大学のゼミの指導教員が責任を持って見守るという枠組みの下ではあるが、彼らが主体的に企画し活動の担い

手となることで、子どもたち、行政、地域、大学をつなぐ触媒となっていることが興味深い。参加する子どもたちから見れば、大学生の「お兄さん・お姉さん」は、大人とは少し違う、いわば「大きな子ども」としての頼れる存在であり、そこに親近感と安心感を伴った絶妙な距離感が生じる。恐らくこの関係性が里山の教育活動を支える土台のひとつとなっている。一方地域の保護者や教育・行政担当者から見ると、学生はこれから地域や社会の成員となる「新人」であり、助言と支援の対象だ。教員は学生を見守りつつ指導し問題があれば責任をとることで学生の立場を補完する。こうした関係性の中で、学生たちが地域の様々なステークホルダーを繋ぐハブになり、自由な発想と感性で取り組んでいけるところが里山教育活動の魅力的なところであるといえよう。

学生からすれば、これらの活動は野外教育のリーダー・講師としての経験を積む体験であると同時に、宮代町という特定の地域にコミットし、深く関わり期待される役割を果たすプロセスであったという意味で、いわば言葉の本来の意味において地域社会の担い手としての“市民”になる経験であるとも言える。市民とは、住民票がそこにあるかないか、というような形式上の話ではなく、特定の地域を自分にとって抜き差しならない・かけがえのないものとして捉え、何らかの役割を担うということだと言えるからだ。やがていずれかの地域の市民となっていく彼らにとっても得がたい体験であったに違いない。

4-4 子どもたちにとっての意義

ここで、子どもたちにとって「手づくり楽器」づくりの体験が、どのような意味を持つのか、昨年までの活動も含めて考えてみたい。

1) 答えの決まっていないことに取り組む体験

参加した学生の感想にも見られたが、子どもたちは必ずしも企画者・指導者側の意図に沿った発見や行動をするわけではない。同じ素材から時には企画者側の思いもよらない、想定とは異なる楽器の使用や奏法を思いついたりする。たとえば、2014年度に、くり抜いた竹筒を腕に通して枝で叩き、ミュートしたような音を発見した児童がいたことなどである。⁶⁾ これは、その場の環境や素材が子どもたちの自由な発想を促し引き出したという意味で大変興味深いことである。「楽器づくりは子どもの音に対する完成の覚醒」(小島 2011)⁷⁾ であるといわれるように、「どんな楽器をつくるか、どのようにして音を出すのか、何がかっこいい音か」など、予定調和的な教育では発揮しにくかった子どもたちのクリエイティビティの発露が見られた。それは同時に音楽における「正しい奏法」「良い音」の呪縛からの開放でもある。

2) 素材との対話

「手づくり楽器」の授業では関心は対象〔楽器の構造・音素材・音色・奏法〕へと向か

う」(山本 2012)⁸⁾といわれる。子どもたちの様子を見ていると、素材の材質の特性、形状、固さ、厚さ、鳴らし方等によって音が異なることを発見し体験している。今回の子どもへのアンケートの回答にみられる「たいこのまんなかをたたく」「ギロで竹のぼうをつよくゆすったところ」等がそれにあたる。「言葉化・文字化できないような素材との感性的対話が成立している」といってもよいであろう。音程や音価に回収できない「音の肌理 (Grain)」に向かい合う体験、これもまた通常の音楽科教育の中で、忘れられがちな視点である。

3) 環境の中の音の発見

「手づくり楽器」づくりワークショップの一連の活動は、自然環境・土地にいわば「可能性」として内在している音を発見し引き出す体験でもある。一見何もないところにも、自分たちの想像力や働きかけによって音が潜んでいるかも知れない、という体験は、最後の合奏の中で行った「楽器の音を徐々に小さくして行き環境音に耳を澄ます」行為ともあわせて、「世界は音に満ちている」という気づき、世界の聴覚的再発見につながるものである。

4) 自分だけの楽器、ここだけの音

今回の企画では、前回までの経験知を活かした結果、「手づくり楽器」づくりの時間にはある程度の余裕をもって臨むことができた。その結果、アンケート回答の「たいこのえをかく」にあるように、子どもたちが自から作った楽器に絵や模様を書き入れるという行程も取り入れることができた。これによって、製作した楽器やそこから生み出す音について、「自分のもの」という意識を持てたことは、とても意味があったことと思われる。世界でひとつだけの「自分だけの」楽器、「ここだけの」音、という想いが、いつか自分だけの表現につながっていくのではないだろうか。

4-5 里山での「手づくり楽器」づくりの活動 兼 古勝史・小林田鶴子

学校内ではなく、野外での「手づくり楽器作り」のワークショップは、それ自体が、「教室」という「場」、「教科」という「枠組み」、「楽器」という完成された「道具」等が否応なしに孕む様々な前提—「関係性」「ドグマ」「価値世界」「予定調和」から自由なれるところに、大きな魅力と学びのチャンスの可能性があるといえる。しかしながら、このような自由さを十分に活かすためには、子どもたちだけでなく、学生たち、指導する側にも感性の柔軟さや臨機応変さ、予定調和にしばられない心のゆとり、真の意味での自由さが必要なことはいうまでもない。

実際に本年度の取り組みでは以下のような場面に遭遇した。グループごとに分かれて会場付近に隠された素材(手づくり楽器の元となるもの)を探しているとき、一人の子どもが、草むらの中に楽器の素材ではなく一匹の昆虫の頭部の死骸を見つけ、子どもはそれを

見つけた驚きと喜びから周囲に大声で「カブトムシ！カブトムシ！」と叫んだ。すぐ隣にいた数人の子どもが振り返ったが、周囲の子どもたちはもちろん、引率指導する学生たちもその誰一人として彼の言葉に耳を傾けず、ひたすら素材探しに余念がなかった。実際になかなか探し物が見つけれず、時間的にも予定時間を超えそうになり、切迫していたことや、不意に発せられたその子どもの声が学生たちの耳にまで届かなかった可能性などを考えれば、ここで学生たちを責めるべきではないだろう。それにもかかわらず、こうした瞬間にその子どもが低学年ならば「カブトムシ食べられちゃったんだ、かわいそうだね」「探し物はまだ出てこないけど、別の宝物を見つけたね！カブトムシは宝物のありが、知ってたかな」「早く楽器が見つかったらカブトムシさんのための音楽を演奏してあげよう」といった共感や、高学年ならば生態系や食物連鎖への興味を引き出し、今探している素材もそうした命のつながりの中にあることなど、別の学びや寄り添い・共有の可能性があり得たかもしれない。些細な事例ではあるが、このような突発的で予定外の出来事への対応や、そこから学びにつなげいく現場力もまた、こうした自由な活動にとって大切なポイントのように思う。教育実践において、自ら立てた目標や計画、手順や工程を意識し、目指すことは重要だ。だがそれは同時に常にそこから自由になれる視野や選択肢を持つことでより広い学びにつながる。これはその場にいた筆者ら教員にもそのまま跳ね返ってくる言葉であるだろう。里山の教育活動をゼミとして経年で取り組み、体験を蓄積できるメリットがこうしたところにもきっと発揮されるであろうことを願っている。

5. おわりに—今後の課題—

田中卓也

里山活動の成功の裏で、今後の課題もいくつか見えてきた。つねに参加スタッフの数が安定しているとはかぎらない。場合によっては、スタッフの人数が多くななくてもできる方法を工夫することが必要である。数が集まらなければ獲得募集に努めなければならない。さらに教育委員会側のスタッフがいつも常置することも難しい。次代に受け継ぐ形で、新たなスタッフの養成においても力を注がなければならないであろう。

学生については、参加する子どもらへの細かな配慮、声かけなどがそうである。まだまだこのあたりについては極めて経験が少ない。また咄嗟の出来事や予定変更に対処できない、という点も見逃せない。児童も人間であり、「生物（なまもの）」である。学生等の予想以上にいろいろなことが起こる。あらゆる事象に対応できるだけの力と、慌てずに落ち着いて対応できる力が学生らに求められることは必至である。さらに企画の単一化の問題も避けられない。里山でできる新たな自然体験プログラムについても検討していかなければならないであろう。

今後の課題を列挙しながら、次年度に継続できる里山自然体験活動になるよう、祈念し

てやまない。

【註】

- 1) 「特集 山崎山の雑木林」(<http://search.yahoo.co.jp/search>)。
- 2) 「宮代マーケット計画」
「農のあるまちづくり 新しい村ホームページ」(www.atarashiimura.com)。
- 3) 同上。
- 4) 高田奈津子 (2013) 「イメージの生成過程の様相：手作り楽器による創作の実践を通して (2. 経験・イメージ・思考, II 音楽経験と認識) 学校音楽教育研究『日本学校音楽教育実践学会紀要』第 17 号、pp.163～164。
- 5) リズム・オスティナート：あるリズムパターンを何度も繰り返すこと。
- 6) 栗原まりい (2014) 「子どもの感性を育む「音」を使った活動について」(『共栄大学教育学部卒業論文』p.18)。
- 7) 小島律子 (2011) 特別企画「耳をひらき。自己を見出す楽器づくり」関西音楽教育実践学会資料。
- 8) 山本真弓 (2012) 「中学校における関心・意欲・探究が持続する授業：手づくり楽器による音楽づくりより (3. 音楽づくり・創作活動の工夫, III 表現活動の展開) (学校音楽研究『日本学校音楽教育実践学会紀要』第 16 号、pp.198～199)。

